

高橋晴雄

四街道在住
大学非常勤講師

107人の尊い命を奪ったJR西日本の脱線事故に衝撃を受けながら、一方イラクでの事態に目を奪われて何週間かが過ぎました。前月までは中国や韓国でのいわゆる反日デモの激発を心配しました。事実にはそれにいたる経過があり原因があります。JRの事故も中国の青年たちのデモも単なる偶発でないことは誰の目にも明らかです。

その視点でJRの事故を見たとき、事実を隠す体質が連続としてあること、現場、現実を担う働く者（運転手）の数十秒単位の遅れミス of 責任追及はテレビで垣間見るだけでも陰惨を極めています。人格否定、心理的物理的強制、賃金カットなどのいじめの中で、運転つまりは働くことをびびってしまう様子が浮かび上がってきています。

この中で5年前に比して会社の今期（2004年）経常利益は約2倍の744億円をあげているといえます。一方安全装置（ATS-P）の予算は19億円から5億円に切り下げられているといえます。ATS-Pの普及率は全線の8%に過ぎないというのに。

利益優先のための安全軽視と働く者への抑圧的な施策はここまで来たのかと多くの方が思ったことでしょう。問題はこのようなことはなにもJRに限ったことではないということです。

私は現在の人命軽視の根っこは第2次大戦前まで遡ると思っています。あの時代ほど人命が失われたことはなかった。日本軍240万人（広島・長崎のぞく）、アメリカ軍41万人が死に中国人の犠牲者は1,000万人、家屋を失ったもの4,200万人という（河出書房、『死者が語る戦争』1983年刊）。

しかしこの途方もない人類史的犯罪について決定を下した者の戦争責任は不問あるいは曖昧にされたことが、戦前の人命軽視の体質を新たな形で継承し、発展させる土壌となったのではないのか。JR西日本の事故はその土壌の中で起きた氷山の一角にすぎないと言っているのではないのか。誤解を恐れずにいえば戦争責任を曖昧にしたツケとも言える。戦争もJRの事故も自然現象ではない。人間が決め、人間が引き起こし、人間が殺された。これはあまりにも自明なこと。しかし原因を究明し決定を下した者の責任を問うことをせず、またそれを許したことを内省できないとなれば、歴史はくり返すことになる。

しかし現在言われ始めている戦前責任とは60年前の責任ではなく、これから起こる戦争、壊滅的環境破壊、人間破壊への流れに対する戦前責任であり、今を生きる者の責任や行動を踏まえて言う言葉でなければならぬという、平たくいえば気づいたときには遅かったと悔やまないように、いま目の前にあることに向き合うことです。

私は去る6月25日、「子育て文化協同」という埼玉の集まりで、ある方の話を聞きました。彼は12年間ベトナム・フエにあってストリートチルドレン自立の子どもの家を立ち上げ、その運営に当たりつつ、年に3ヶ月

は日本に帰り、「ベトナム『子どもの家』を支える会」代表として全国を飛び回っているといえます。

彼は46歳で小学校教師を辞めました。旅行中、目の前で出会った路上生活児童をなんとかしたいという思いで日本を後にします。爾来12年間、彼は起居を共にしながら路上生活児童を我が子のようにして人間の尊厳の回復と自立を助けます。一緒に食べ、ともに学び、けんかを仲裁し、保護者を捜し、生活をつくる中で子ども達は見違えるようになって巣立っていったといえます。今も68名が子どもの家で生活しています。これを支える1,400人の日本の仲間がいます。

この方は小山道夫という名前です。彼はベトナム戦争の本質について識りすぎるほど識っています。私もかつて4度5度ベトナムを訪ねたときストリートチルドレンの存在や戦争の傷跡の大きさに気の遠くなる想いをしました。穴ぼこだらけの国土、はげ山の森、山、丘陵。多数の奇形児。ベトちゃん、ドクちゃんがいるツヅー病院では、おびただしい奇形児、多くの生き証人とホルマリン容器の中の子どもたちに出会いました。

私はベトナムに惨禍をもたらしたアメリカ、そして国際社会が人類の犯した最悪の犯罪の責任として出来る限りのことをすべきだと思いました。その主張はいまでも変わりません。

しかし小山さんは違っていました。為政者の責任追及は人後に落ちないにもかかわらず、彼はそれだけにとどまりませんでした。ドイモイ政策の結果として新しい形の路上生活児童の発生もありますからベトナム政府が解決すべきと主張も出来るでしょう。

しかし彼は政府の責任というだけで自分は手をこまねていることはしませんでした。目の前にいる子どもたちに直接手を差しのべたのです。子どもの自立のための場に自らの身を置き共に暮らし、自転車修理、縫製工場、日本語学習、料理などを学ぶ場をつくり、自立をサポートし、また日本の大学生や引きこもりの子どもの研修も受け入れてきました。私は仲間とベトナムでの学校づくりの募金活動をした程度でしたが、彼はその場に自分の身を入れ笑顔の新たな世界をつくり人材を育ててきました。

さて憲法9条とベトナムの小山さん等が切り開く世界がどうつながるのか。憲法前文には、

われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと務めてゐる国際社会において名誉ある地位を占めたいと思ふ。

全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和の内に生存する権利を有することを確信する。

日本国民は国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。と、書かれています。

小山さんはこの崇高な理想の実践者の一人です。憲法を守ることは緊急性を帯びてきています。しかし憲法を守れと叫ぶだけでは、これまでもそうだったように憲法の空洞化を防ぐことは出来ないのではないのでしょうか。小山さんのように憲法を実践し憲法で現実を磨き日常をつくる実践で対峙しなければなりません。根拠地を持って憲法を守る主張をし、つながって大きな力にしていく。

幸いにして四街道9条の会は、子どもの居場所づくりや地元農産物農家を大切にする会、不当な産廃や放置ゴミなくす会、よい芝居を見る会、身近な自然を大切にする環境関係さらには福祉関係の市民活動に熱心な方によって先月つくれ、9月19日には井上ひさし氏を迎えます。よりよく生きることの価値を实践する土台に平和があり、9条があることを学びとるためです。

労協や協同総研もかつて私が身を置いた生協とひと味違った実践をしてきていることを識りました。ともに関わって学びたいゆえんです。